在宅ホスピス医の体験記を読んで

「死（＝生）に向き合う人と係わり合う者の任務の一つ…（バックナンバー緩和ケア関係 P2004/3/7：参照)」に記載のように、「死に逝く人とともに」等の言葉の中身が気になっていた折り、「『ありのままの死』みとって－在宅ホスピス医が体験をつづる－（朝日新聞、2004/3/7）」の記事を目にし、著書「いのち、生きなおす」を、早速購読した。

Ｄｒは、「病院の隅で小さく扱われる人の死を、日常の中に、家族の中に、明るさの中に戻したい」の思いで、この十年近くの間に１４０人の末期がんの方を家族と一緒に在宅で看取ってきた。本は、その瞬間までの本人、家族との係わりを様々な事例を淡々と記している。正に、私が知りたい言葉の中身の具体的なそのものであった。

３６５日、２４時間の係わりだけに、時に心身消耗の状況、また、緊急往診時のスピード違反等の体験も綴られ、在宅ホスピス医は想像に絶する心身共にハードな仕事のよう。それでもなお、Ｄｒは、「この仕事に出会えて幸せだった。天職だった。」と一人頷き、今も在宅ホスピス医としての日々を過ごしているようである。

Ｄｒは、「最善を尽くしたと思う医療者の満足度と治療を受けた人や家族の満足度は決して同じでなく」、「悲しみは時が少しずつ温かく癒してくれるが、後悔は心の傷になり、いつまでもかさぶたをつけない」から、本人、家族が在宅での死を望むなら、そのケアを本当に骨身を惜しまずに付き添い続けているようである。

「人生には『仕方ない』『仕様ない』と思わなければならないことが幾つもあって、その最も辛い悲しいことが『死』かもしれない」。それ故に、本人も家族も共にその死に向き合うという、「その苦しみを経ないと『生きなおす』ことができない」し、「人生の最後は尻尾でなく、全体なのだ。」との思いから、そのプロセスに寄り添い、その瞬間まで互いに「いのち、生きなおしましょう」と呼びかけているようである。

Ｄｒは、幼い子どもであっても親の死という、その子なりの「その『納得』こそが、大人たちと同様に、その後の彼らの人生に必要である。成長のプロセスで節目、節目に親を求め、淋しがっているのを、子どもは直接言葉や涙で表現ことが少ないだけに、周りが見落とさないように、周りの見守りが大切」と説いている。

ともかく、会話のやりとりの詳細まで記載されていますので、自らの死（＝生）のあり様に、また、その時の人の心の揺れやケアに関心ある方は、ご一読をお推めします。

（2004 年 03 月 11 日　記）